

望岳山荘

にて

『市民タイムス』の「松本平人物誌」に「地方史の巨星 一志茂樹」(倉科平・作、宮浦真之助・画)と題して連載された文章のなかに、茂樹が池田尋常小学校の代用教員になったとき、彼に「日樺」の存在を教えて多くの影響を与えた同僚に寺島理吉がおり、「理吉はのちに白山卓吉と名の画家になった」との一節を見つけて、私は大変感慨深かった。なぜなら、白山先生は、

私の亡き父とも大変親しく、わが家へも頻繁に来られたばかりか、私が若き日に絵(水彩画)を習った恩師だからである。そして、一志先生も実は私の恩師なのである。もっとも、それは私の幼稚園の園長先生としての恩師であり、中央

い。

ところで、「松本平人物誌」によると、「昭和十六年四月、茂樹は松本開智小学校長に転任」とある。一幼稚園史にしてこれほど見事な資料集があろうかと

であった。私はそのとき、中町二丁目の自宅から松本城に近い小柳町の松本幼稚園に三年間通ったので、赤羽、太田、保科の諸先生や担任の杉浦真美先生らの懐かしいお姿とともに、柔和な微笑みをしたたえた優しい一志園長先生のことをよく憶えている。

一志先生と松本幼稚園

の学界にもお名前が知れていた一志先生のことと、のちに西洋史の林健太郎氏(元東大総長)とお話したことなどもあるけれど、私が直接学問上の御指導を受けたわけではな

思う「松本市立松本幼稚園百年誌」(昭和六十二年刊)によると、一志先生は、太平洋戦争期の昭和十六年から同二十年までの四年間、開智小の校長と兼務で松本幼稚園の園長

は、戦時下とはいえ、大変楽しく、二階の大広間で劇をやったり、裏庭では小運動会、それに門を入ったところには立派なジャング

ルシムがあった。とくに二階から一階へ降りる階段の脇に長いすべり台がついていることが園児の自慢だった。普通は長くて二年間の在籍なのに、私は変則的に一年早くから三年間もお世話になり、「赤組」を二回やって「むらさき組」に進んだのだが、当時の園長先生がのちにわが国を代表する郷土史家になった一志茂樹であったことを知る卒園生は、あるいは少ないかもしれない。(中嶋 嶺雄・東京外語大教授)